「神を教え込む」

申命記６：４－９

November.8.2026

申命記６：４－９（パワポ）

Preface

今朝は幼児祝福礼拝で、第二礼拝で（たった今）幼児祝福式が執り行われます（ました）。

日本の年中行事の中に、子供たちの成長を祝い、子どもたちの安寧を祈願する七五三がありますが、教会では、七五三の代わりに、唯一まことの神イエス様に子どもたちの祝福をお祈りする時を持ちます。

宗教や文化やお国柄という枠を超えて、私たち大人が共通して願っていることは、子どもたち・次の世代の安寧や繁栄だと思いますが、聖書にも色んな所に、子どもたちや次の世代の祝福を神様ご自身が願っておられることが書かれております。

例えば、新約聖書を見てみますと、イエス様が子どもたちを抱き寄せて、子どもたちを祝福して下さっている記録があります。

また、旧約聖書のモーセの十戒の第二戒には、「わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施す」と宣言して下さっているように、神様は何としてでも、咎ではなく、恵みを祝福を子どもたちに施してあげたいと願っておられます。

正に、親心で、私たちのことを、私たちの子どもたちのことを思っていて下さっているのが分かるかと思います。

そこで今朝は、いつものエペソ書ではなく、幼児祝福礼拝に即しているだろう思われる御言葉、先程お読みしました申命記６章の御言葉について考えて行きたいと思います。

Part One

私は、日本生まれの韓国人という、日本と韓国という二つの国の文化が私の中に息づいております。

そして、この二つの国ですが、色んな共通項と言いましょうか、似ているところがあるように思えます。

色々とあると思いますが、そのうちの一つが、子どもたちへの教育熱です。

戦後８０年前の日本と韓国は、全くの廃墟のような国となってしまいました。

両国ともに、世界で一番貧しい国の内に数えられるような状態に陥り、支援や援助なしには生きられない、国を営むことが出来ないような国となってしまいましたが、戦後８０年の間に、その廃墟のようなところから立ち、世界の先

進国の内の一つに数えられるようなものすごい経済的発展を遂げた国となりました。
日本の経済発展を「東洋の奇跡」と言ったり、韓国の経済発展を「漢江の奇跡」と言われたりもしました。
東南アジアの国々は、そんな日本と韓国の経済発展に倣いたいと、日本と韓国を学ぼうと、研究対象にして来たそうです。

もう大分前になりますが、私がマレーシアの首都クアラルンプールに行きました時、２０世紀の超高層ビルとして最も高いツインタワーという高さ４５１．９m＆８８階建てのビルを見て、その中に入ったことがあるのですが（写真を出す）、高層のオフィスビルが二つ建っており、それを真ん中あたりで結ぶ連絡橋で繋がっているビルです。

写真１（パワポ）
マレーシア　ツインタワー

この二つのビルのどちらを先に建て上げるのかの競争をさせながら建てたそうなのですが、その競争をした企業というのが、一方は日本のハザマという中堅ゼネコンの建設会社、もう一方は韓国のサムスンという今では半導体やスマホで名を馳せている企業でした。
日本の企業と韓国の企業に、マレーシア国家を挙げた超高層ビルの建設を任せるという、ある意味日本と韓国の経済発展を象徴するかのような建物にもなったようです。

多くの開発途上国が、そんな日本や韓国を研究対象にして、どのようにして、廃墟のようになった国が、援助や支援を受けていた国が、援助する側の国になったのかと研究して来たそうです。
そして、出した答えが、「教育熱」です。

これと言った天然資源のない日本と韓国、これも両国の共通点だと思いますが、そのような国がどのようにして、短期間の間にものすごい経済発展を遂げたのか？
それは、子どもたちに勉強をさせたということです。
子どもたちに学ばせたのです。
多くの天然資源にも勝るほどの人的資源を育成して来た、その人的資源、即ち、育てた人材をもって復興と発展を成し遂げてきたと言うのです。
正論だと思います。
確かに、私たちの教育熱が行き過ぎて、様々なひずみや副作用を生んできてしまっているというのも確かだと思いますが、それでも、子どもたちに勉強させることとか、熱心に教育を施してきたということそのもの自体をむやみやたらと馬鹿にしたり、卑下したり、軽んじたり、無視したりするのは、それもま

た違うように、行き過ぎた反応のように思います。

いずれにしても、日本と韓国が経済発展し、復興を遂げてきたのは、並外れた日本と韓国の親や大人たちの教育熱のためだったと言うのです。
それは、今でも変わることがなく、ある面では、もっと激しく、もっと過酷になっているのかもしれないなと、子どもたちがかわいそうに思えてしまうくらいです。
大学入試試験の内容を見ましても、私が大学を受けた３２年前よりも明らかに問題も難しく、しかも科目数まで多くて、果たして私たち大人は、子どもたちに何を求めているのかと、疑問を呈したくなるほどです。

じゃ、「そこまでして私たち親や大人がしていることは、果たして教育なのだろうか？」ということを考えさせられますし、今日の聖書箇所申命記６章も、私たち親に、大人に問うているような気が致します。

Part Two

そこで先ず考えたいのは、教育の目的とは何だろうかということです。
教育の目的って何でしょうか？
教育の目的ってなんだとお思いになりますか？
子どもたちを教育しようとするならば、教育の目的が無ければならないですよね。

他の方の意見などを参考にして、私なりに、子どもたちを教育する目的を三つほど考えてみました。
まず一つ目は、「真っ当な、もしくは健全な人生観、価値観、哲学を植えてあげること」です。
これは、とても重要な教育の目的となり得ると思います。
人生観や価値観や哲学が誤っているのに、その上に、何か多彩な才能ばかりをたくさんたっぷりと積み上げていくことは、ある意味とても危険なことのように思います。

そして、二つ目に、価値観や哲学に引けを取らない程に大事な目的が、品性や人格などの人間性の育成だと思います。
人への礼節礼儀、または被造世界・自然世界に対する配慮の気持ちや良い習慣など、これも、教育なしにはならないものでしょう。

そして三つ目に、この社会を、この世の中を生きていく上で必要な才能や能力を訓練すること、世の中を生きていく上で必要な道具となりえるものを身に着けさせてあげること、これも、教育の重要な目的・目標だと思います。

では今、私たちが施し、施そうとしている教育は、どこにばかり偏っている

でしょうか？
　大方、三番目ばかりに偏っているのかもしれないと思わされました。
　いい大学に入って、いいところに就職して、才能豊かで、能力のある、生産性の伴う人となって、世的に成功すること。
　三つの教育目標のうち、三番目の目標にぴったり合ってはいますが、じゃあそれだけでいいのか？
　それが全てではないですよね。

　もし三番目だけが教育の目的ならば、有能な人間、能力のある人材、経済的生産性のある人材は良く育つかもしれませんが、基礎がないために、品性も人格も伴わない、真っ当なと言いましょうか、健全な人生観や価値観・哲学も立てられていないために、あたかもそれは、基礎なしに高層ビルを建て上げるようなものではないだろうかと思えてしまいます。
　崩れます。
　崩れてしまうでしょう。

　決して、人間の有能さや能力や才能、またはその産物である技術が、平和で、麗しく、生きるのに良い社会・世の中をつくるのではないでしょう。
　もしかすると、いや確かに聖書の記述から考えますと、人間の有能さや能力が、不安で、恐ろしく、破壊的な世の中をつくってしまったことは事実だと思います。
　人間の能力によって人間が破滅する、この世界が破滅するというようなことが事実起こっているように思いますが、それは、基礎がつくられ、磨かれていないからだと言えるのでしょう。

Part Three

　今日の聖書箇所をもう一度読んでみます。

申命記６：４－９（パワポ）

　「唯一の神、主なる神様を心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くして愛することを、あなたの子どもたちによく教え込みなさい」と言います。
　「学校に送って、塾に送って、いい習い事をさせて、それで全部、教育は施したとするのではなく、あなたがたが、子どもたちに教えなければならないものがある。　それは、人の人生、価値観、哲学、世界観、そして、品性や人格のようなもので、それを何をもって教えることが出来るのかと言うと、唯一まことの神を信じる信仰で、神のことばで教えることが出来る」と、言います。

　それは、塾に送って教えられることではなく、学校で教えられるようなことではないでしょう。
　もちろん、人の定めた特定の倫理道徳的なものは教えることが出来るかもし

れませんが、もし人間に倫理があり、道徳があるならば、もっと根本的なもの、もっと根幹的なもの、もっと基礎的なものです。
倫理や道徳的なものが作動するように、働くようにする動力、源、エネルギー源、もっと中心的で、もっと核心的で、最も不可欠なもの。
そして、それを教える、いや、「教え込む」と言っていますが、それを教え込む責任は、私たち親にあると言います。

「もし、これをあなたがた親が教えないならば、どんなに学校に送り、塾に送り、習い事に送り、才能を発掘し、能力を育て、有能な人材になったとしても、あなたがたの子どもたちは必ずや崩れ落ちる、人生を空しく生き、虚無に伏すようになる。不幸を味わることになる。だから、必ずや教えなさい。教え込みなさい。まめに、勤勉に教え込みなさい」という鬼気迫るような言葉で、迫って来ます。
息苦しさを感じる程です。

「座っている時も、起きる時も、寝る時も、道を歩く時も子どもたちに語り、神の言葉を親であるあなたの手に結び付けて、額にまで貼って、まめに教え込みなさい」と、少し過大な表現のようにも感じてしまう程に、「とにかくまめに、聖書の御言葉を教え込みなさい」と言います。
「神を教えなさい。誰が？　あなたが、教え込みなさい」と言います。

ですが、「ふーっ」ですね。
私たち親は、それを良く教え込むことが出来ません。
出来ていません。
出来ていないように思います。

Part Four

では何で、親たちは、子どもたちに教え込むことが出来ないのでしょうか？
出来ない理由は、たった一つだと思います。
知らないからです。
知らないと、教えられません。

我が家にも４人の子どもたちがいて、二人の大学生と、一人の高校生と、一人の中学生がいますが、彼らが所謂勉強している内容を、私も家内も教えることは出来ません。
特に理数系の科目なんか、ちんぷんかんぷんです。
昔取った杵柄のようなもので教えようとしても、全く歯が立ちません。
もう忘れていますし、今の彼らの勉強の内容が分からず、知らないからです。
知らないので、教えることが出来ません。
そりゃ当然です。
私たちは、知って初めて、教えることが出来るからですよね。

この申命記の御言葉を見ますと、やたらと出て来る言葉があるのですが、「あなた」という言葉です。
つまり、子どもたちではなく、「あなた」、親である私たち一人一人がまず先だと言うのです。

申命記６：５－７（パワポ）

「親が子どもたちに教えて、初めて子供たちが幸せに暮らす、良く生きることが出来るのに、そして、それは親に与えられた特権であるのに、そうするためには先ず、親が知らなければならない」と言います。
「先ず親が、人生をそのように歩まなければならない」と言うのです。

私がそのように生きていなくては、子どもたちに神さまを教えることが出来ません。
だから、私という人が、私という親が、この御言葉を生きることがとても重要なことになってきますが、これが、どんなに難しいことが分かりません。

お金を稼ぐこともこの世の中を生きていく上で大切なことだと思いますし、必要なことだと思いますが、お金を稼ぐことだけが大切なことではありません。
お金を稼いで、子どもたちが望むものを買ってあげて、着せてあげて、おこづかいをあげて、良い学校に送ってあげて、良い塾に送ってあげて、良い習い事をさせてあげること、これが親の責任の全てではありません。

もちろん、これも大事なことだと思いますが、子どもたちに人生を、信仰を、神様を、主イエス様を教えることが出来る信仰のある親となることが、どれだけ重要なことか分かりません。
誰のためにでしょうか？
まず、私たち自身のために。
そして、私たち自身よりも何倍も、何十倍も、何百倍も、何千倍も大切な子どもたちのためにです。

どの親自身も、信仰を生きる葛藤していると思います。
でも、この葛藤は決して悪いことではなく、むしろ、必然であり、恵みだと思います。
だからこそ、本当に子どもたちを教え込むことの出来る真摯な信仰を持つ、信仰の中の信仰を持つ、そのような私たちでありたいと願いますし、私たち皆が、そうあらせて頂きたいと主に祈らずにはいられない気持ちになります。

Part Five

今日のこの聖書箇所を見ますと、「道を行く時も、座っている時も語り、家の戸口の柱や門にも、あなたの手首や額にも御言葉を貼っ付けておきなさい」

と、「至るところに四方八方に神様の御言葉が見えるようにしなさい」とありますが、もう引退をされた私の尊敬する牧師先生の奥様が、この御言葉に倣ってご自分の子どもたちにされたことがあると聞いたことがあります。

３人のお子さんがいらっしゃるのですが、３人の子どもたちが幼い時に、記憶力がいい時に、神様の言葉一つでも心に刻んで覚えてもらうように、使い古したカレンダーの裏紙に聖書の御言葉を一節ずつ書いて、食卓の前の壁に貼っておいたそうです。

１週間経つと張り替えるのですが、ご飯を食べる前にその御言葉を読んで、お祈りして、ご飯を食べるようにしました。

何日かすると、子どもたちがその御言葉を覚えて、その御言葉を見もせずに、ちょっとふざけた感じで、「わわわー」と諳んじて、ご飯を食べるようになりました。

夫の牧師先生は、これが何の意味があるんだろうかとちょっと思っていたそうなのですが、奥さんがやることなので、そのままにしといたそうです。

するとある時、幼稚園の年長さんか小学校一年生ぐらいだった三男が、たばこの形をしたガムを口にくわえて家に帰って来ました。

そして、お母さんの前でそのたばこガムをふかすようなまねをしたところ、お母さんが本当のたばこを口にくわえているものだ驚いて、はたきを持って叩こうと向かって行きました。

すると、その子が、「ママ、ちょっと待って。違うよ。これただのガムだから」と言って、そのガムを噛み始めたそうです。

お母さんが面食らって、はたきで叩こうと思って手を上げたけれども、たばこじゃないから叩くわけにはいかないし、叩かないにも、上げた手をただ下げるのにはなんか恥ずかしい気もするしと思っていたところ、その時、ソファーで横になっていた２番目の子が起き上がってこう言いました。

「『あらゆる形の悪から離れなさい』と言っているのになあ」と、第一テサロニケ５：２２の言葉を諳んじたのです。

その子は、その言葉の意味もよく分からずに読んでいて、また忘れていたはずなのに、ぴったりの状況が目の前に広がると、人間って不思議だなあと思うのですが、その言葉の意味をその子なりに一瞬のうちに無意識のうちに探り、悟って、その瞬間口から神の言葉を発したのです。

そうして結局、弟は、お母さんから一発喰らうことになりました。

その光景を見ていた夫であり父親である牧師先生は、「ああ本当に神様の言葉は、生きて働いているのだなあ。恐いなあ」と、子どもたちに御言葉を教えること、信仰を教えること、幼ければ幼いほどにどれだけ重要なことかということを切実に知った出来事だったと仰っていました。

Part Six

私たちは親は、大人は、子どもたちに、神を教えることが出来なければなりません。
神の言葉を教えることが出来なければならないんだと思います。
私が言っていることではなく、神様が仰っていることです。

人が人らしく生きることとは何なのか。
どのように生きることが、主なる神様の御心に適うことなのか。
主の御心に従って生きるとはどういうことなのか、主の御心に従って生きるとどう幸いなのか、その御心に従っているならばどのようになるのかを見せてあげながら、子どもたちに教え込むことの出来る信仰のある親、大人でありたいと、祈らずにはいられない気持ちになります。

私たち一人一人が、神の言葉に接しながら神の言葉を行う者となる。
それが私たちの生き様・人生そのものとなり、私たちの信仰となるようにしたいと願うのです。

知っていれば、教えることが出来ます。
でも、知らなければ教えることが出来ません。
行ったことのある道は説明出来ますが、行ったことのない道については、どのようにしたら教えることが出来るでしょうか。

私たちが、子どもたちに神について教えることが出来ないのは、私たちが神様を遠くに置いておいたからなのでしょう。
結局、信仰がなかったから、そうしたのかもしれない…
でも、信仰において、遅かったという時はありません。
今だと思えば、そこから信仰は始まります。

今日の御言葉は、私個人的にも、心に迫ってきました。
「子どもたちに神様を教えることが出来るほどに、神様を信じなさい」
これが、今日、神様が私たちに下さった大切なメッセージではないかと思います。

Conclusion

イエス様のことをよく信じて、イエス様を信じることにおいて恵みに満ち溢れるものとさせて頂いて、その恵みで子どもたちを教え込むことの出来る親になりたい。
その信仰ゆえに、人にとって最も大事な、神を信じる、イエス様を信じる力を良く育ててあげる、子どもたちに教えられる幸いな信仰の教師となるよう、私たち皆、私たちに連なる子供たち、孫たち、子々孫々、永遠に神様の祝福に与る者となるよう祈って行きたいと思うのです。

お祈りいたします。

祝祷：あなたは心を尽くし、いのちを尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。これをあなたの子どもたちによく教え込みなさい。